

## 牟礼遺跡周辺の様相（中世）

木村 健明

### 1. はじめに

牟礼遺跡は茨木市末広町、中村町、双葉町、中津町、舟木町、園田町にかけて（東西約660m・南北約960m）広がる遺跡である（図1）。遺跡の発見は、1985年に行われた商業施設の建設に伴う調査を契機とする（茨木市2014）。周囲にはその後に発見された牟礼東遺跡・永代遺跡・舟木遺跡などが位置する（図2）。

当該地域はかつて耕作地が広がっていたが、現在では阪急電鉄京都線茨木市駅の東側という利便性の高さから商業施設や住宅地となっている。そのため開発件数も多く、計画内容に応じた確認調査・本発掘調査を実施している（図2・註1）。ただし、敷地面積が小規模な個人住宅・分譲住宅を対象とした調査が多い。また確認調査の結果を



図1 牟礼遺跡位置図

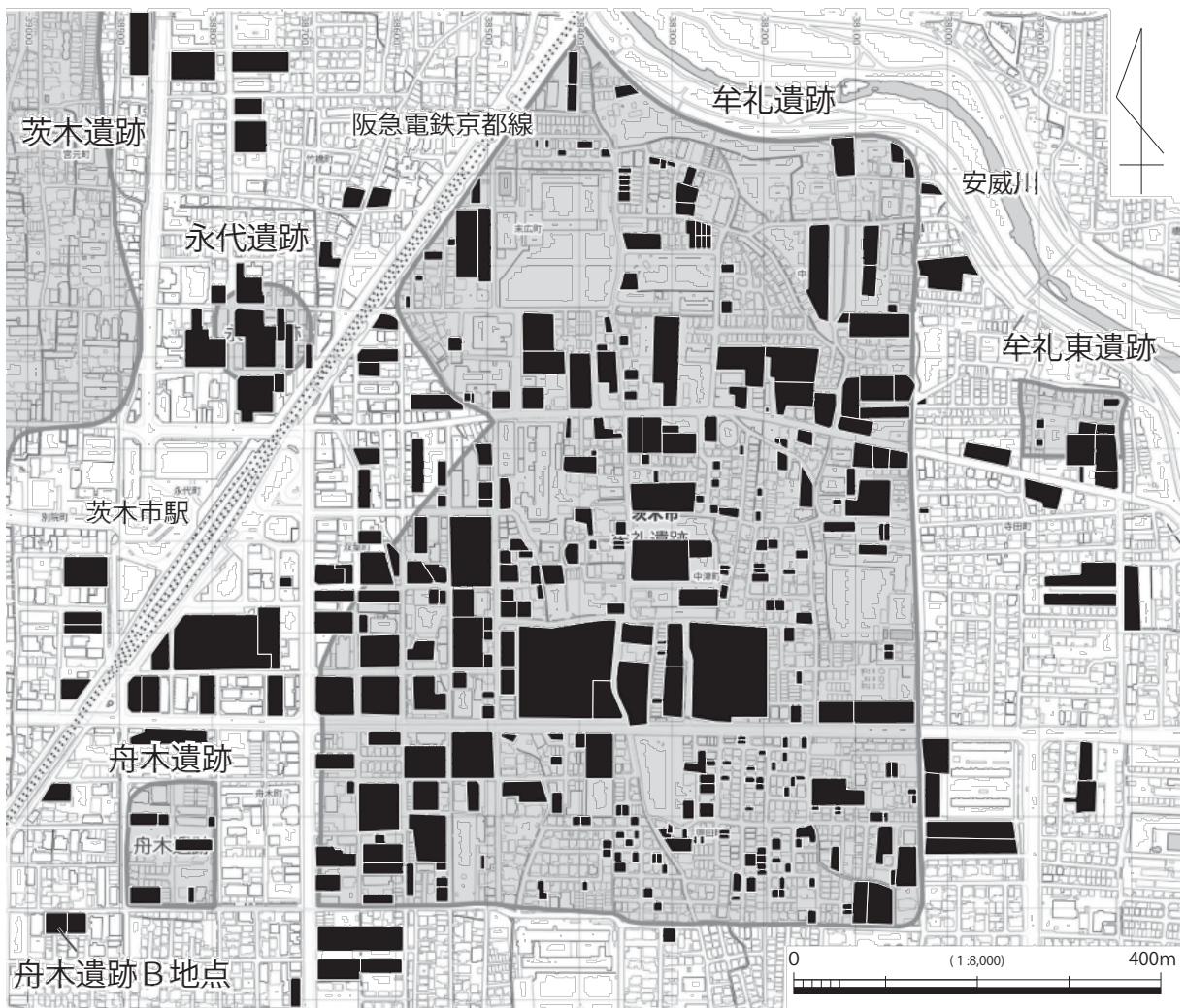


図2 牟礼遺跡と周辺遺跡の調査地点位置図

受けて設計変更がなされた地点も存在する。そのため、遺跡内の様相には未だ不明な点が多い。しかし、継続して調査を実施してきたことで、近年では遺跡発見時に確認された縄文・弥生時代のみならず、古墳時代や古代・中世の遺構・遺物が複数の地点で確認されている（註2）。

ただし、これらの成果は、これまで面的な広がりとして把握できていなかった。そこで本稿では、比較的多くのデータを得ている中世の遺構・遺物の広がりを確認することを目的とする。

なお、東側の牟礼東遺跡、西側の舟木遺跡・舟木遺跡B地点でも中世の遺構・遺物を確認していることから、これらの遺跡も含めて述べる。

## 2. 中世の遺構・遺物出土地点について

現時点で中世の遺構・遺物が確認されている地点は図3に黒塗で示した（註3）。なお、牟礼遺跡内の標高は、現況では北端が11 m程度、南端が8 m程度で、安威川沿いが高く、南に向かって

緩やかに低くなる地形である。

以下、遺跡ごとに各地点の概略を記す。なお、図4・5の遺物図面は、既刊報告書に掲載しているものを集成した（註4）。

### 牟礼遺跡

中世の遺物が出土しているのは以下の32地点である。

- ① 1993年度（中津町）現地表下1.25 mで確認した淡黒色砂（層厚0.12 m）から12世紀後半の瓦器が出土している。
- ② 1996-1（中津町）現地表下1.4 mで確認した褐灰色シルト（層厚0.6 m）から土師器・黒色土器・瓦器が出土している。包含層下面でピット・土坑・溝などの遺構を検出している。
- ③ 1998-1（舟木町）現地表下0.6 mで確認した淡褐色砂質土（層厚0.4 m）から土師器・須恵器・瓦器・磁器などが出土している。検出した遺構は耕作関連溝が主体であるため、当地は耕作地として利用されていたと考えられる。

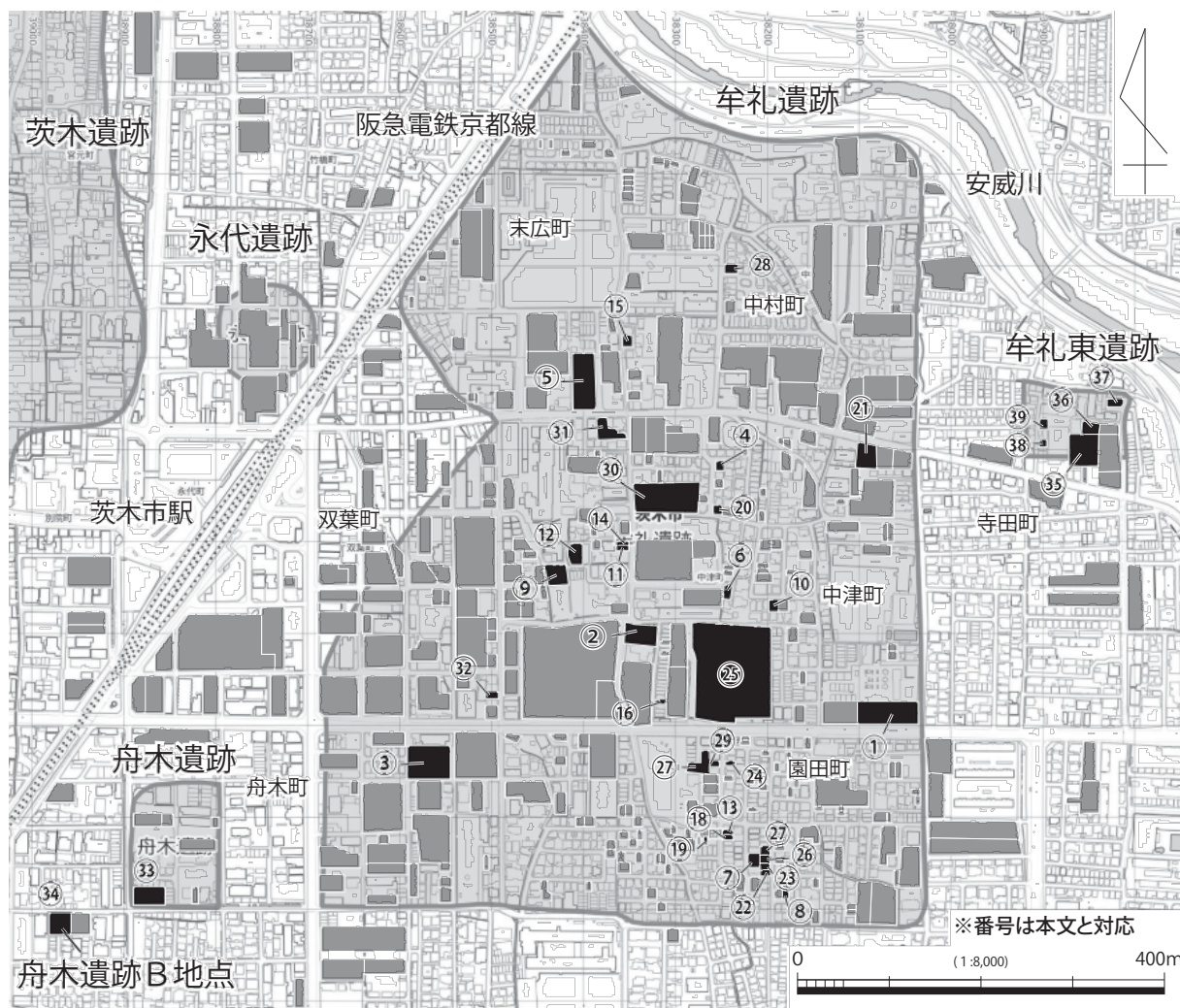


図3 遺物出土地点

- ④ 2001 年度（中津町）現地表下 1.8 m で確認した褐色土（層厚 0.15 m）から土器の小片が出土している。
- ⑤ 2002-1（末広町・茨木市教育委員会（以下、市教委）2003）現地表下 0.9～1.2 m で確認した褐灰色粘質土（層厚 0.1～0.15 m）から土師器・黒色土器・瓦器などの遺物が出土しており、包含層下面で 12 世紀後半～13 世紀にかけての耕作関連溝・柱穴・土坑などを検出している。
- ⑥ 2002 年度（中津町）現地表下 1.6 m で確認した淡青灰色粘性土（層厚 0.6～0.8 m）から土器の小片が出土している。
- ⑦ 2004 年度（園田町）現地表下 1.3 m で確認した黒褐色粘土（層厚 0.2 m）から土師器・黒色土器が出土している。
- ⑧ 2007 年度（園田町）現地表下 1.3 m で確認した暗灰褐色粘土（層厚 0.2 m）から須恵器が出土している。
- ⑨ 2008 年度（中津町）現地表下 1.35 m で確認した褐灰色粘質シルト（層厚 0.2 m）から土師器が出土している。

- ⑩ 2009-1（中津町・市教委 2010）現地表下 1.6 m（標高 6.3 m 付近）で確認した褐灰色粘質土（層厚 0.1 m）から 11 世紀後半～12 世紀前半頃の土師器・瓦器の小片が出土している。
- ⑪ 2009-2（中津町・市教委 2011）現地表下 1.5 m（標高 6.4 m 付近）で確認した水田面と考えられる灰色粘土層を被覆する砂層（層厚 0.1 m）から 11 世紀代の土師器が出土している。
- ⑫ 2010-1（中津町・市教委 2011）現地表下 1.1 m（標高 7.9 m 付近）でピット・土坑各 1 基を検出した。土坑から土師器・瓦器の小片が出土している。
- ⑬ 2010-2（園田町・市教委 2011）現地表下 1.0 m（標高 6.2 m 付近）で確認した黒褐色土（層厚 0.2 m）から土師器・瓦器などの小片が多く出土した。同一層中に弥生土器片も含んでおり、周辺より運びこまれた整地土と判断している。
- ⑭ 2010-3（中津町・市教委 2011）現地表下 1.4 m（標高 6.2 m 付近）で確認した暗灰褐色粘土を被覆する青灰色～暗青灰色砂（層厚 0.4 m）から 11 世紀代の土師器・白磁、13 世紀頃の瓦器が出土している。

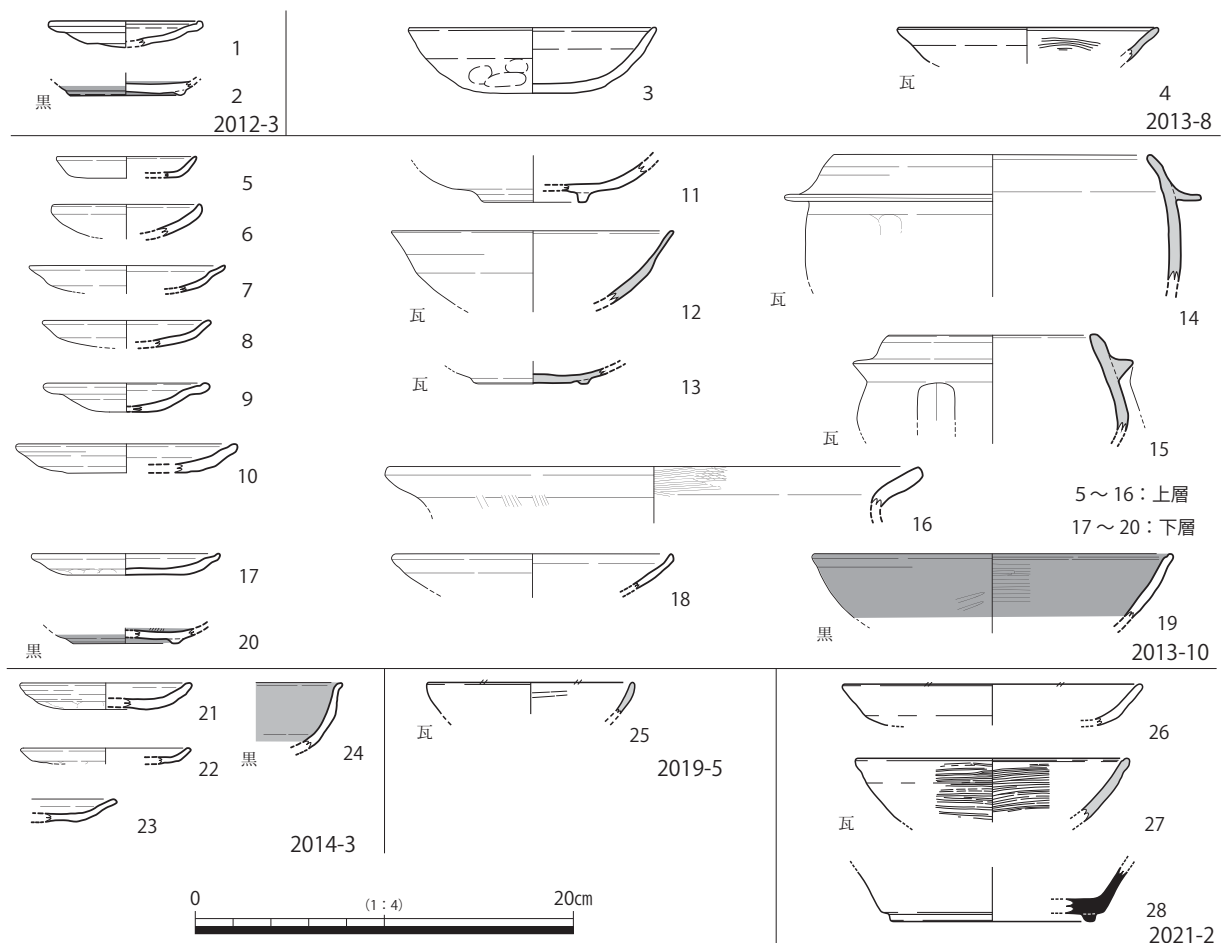


図 4 牟礼遺跡 出土遺物実測図

土している。

⑮ 2010 年度（中津町）現地表下 0.75 m で確認した黄灰色粘質土（層厚 0.2 m）から土師器の小片が出土している。

⑯ 2012-1（中津町）現地表下 1.45 m 以下で確認した灰色粘土（層厚 0.25 m）から 12 世紀代の土師器・瓦器、黒色粘土（層厚 0.1 m）から 11 世紀～12 世紀代の土師器・黒色土器が出土している。

⑰ 2012-3（園田町・市教委 2013）現地表下 1.5 m（標高 5.5 m 付近）で確認した暗灰色粘土（層厚 0.2 m）から 12 世紀頃の土師器・黒色土器（図 4-1・2）が出土している。

⑱ 2013-6（園田町）現地表下 1.5 m で確認した包含層から土師器・瓦器が出土している。

⑲ 2013-8（園田町・市教委 2014）現地表下 1.55 m で確認した黒褐色砂質シルト（層厚 0.25 m）から 13 世紀後半～14 世紀初頭頃の瓦器（図 4-4）が出土している。同一層中から 7 世紀～8 世紀の須恵器、9 世紀～10 世紀の土師器（図 4-3）も出土している。

⑳ 2013-10（中津町・市教委 2015）現地表下 1.4 m（標高 7.8 m 付近）以下で遺物を包含する黒褐色粗砂混じり粘質シルト（上層・層厚 0.2 m）と暗褐色粘土（下層・層厚 0.2 m）を確認した。上層から 12 世紀～13 世紀の土師器・瓦器・瓦質土器（図 4-5～15）、下層から 11 世紀の土師器・黒色土器（図 4-17～20）が出土している。

㉑ 2013 年度（中津町）現地表下 1.8 m で確認した包含層から土師器の小片が出土している。

㉒ 2014-3（園田町・市教委 2015）現地表下 1.9 m（標高 5.3 m 付近）で確認した黒褐色粘土（層厚 0.2 m）から 10 世紀半ば頃の土師器・黒色土器（図 4-21～24）が出土している。

㉓ 2014-5（園田町）現地表下 1.8 m 以下で確認した黄灰色粘質土（層厚 0.1 m）から 13 世紀中頃の土師器・瓦器、暗黄灰色粘質土（層厚 0.1 m）から 12 世紀前半の土師器・瓦器が出土している。

㉔ 2015-11（園田町）現地表下 1.7 m（標高 5.75 m）で確認した黄灰褐色極細砂混じり粘質シルト（層厚 0.1 m）と現地表下 2.0 m（標高 5.45 m）で確認した黄灰色細砂混じり粘質シルト（層厚 0.1 m）から古代～中世の遺物が出土している。

㉕ 2016-1（中津町）現地表下 2.1 m（標高 5.8 m）

で水田畦畔を検出している。遺物は土師器・須恵器・瓦器が出土している。

㉖ 2017-4（園田町・市教委 2018）現地表下 1.7 m で確認した灰色粘土（層厚 0.4 m 以上）から土師器・須恵器の小片が出土している。

㉗ 2019-3（園田町）現地表下 1.45 m で確認した灰色粗砂混じり粘質シルト（層厚 0.15 m）から土師器・瓦器・瓦質土器が出土している。

㉘ 2019-5（中津町・市教委 2021）現地表下 1.3 m で確認した灰色粗砂～礫（層厚 0.2 m）から土師器、13 世紀末～14 世紀前葉の瓦器（図 4-25）が出土している。

㉙ 2021-2（園田町・市教委 2024）現地表下 1.2 m で確認した黒褐色粗砂混じり極細砂～シルト（層厚 0.1 m）から 12 世紀前半の土師器・瓦器（図 4-26・27）が出土している。同一層中から 9 世紀の須恵器（図 4-28）も出土している。

㉚ 2023-1（中津町）現地表下 1.0 m で確認した青灰色シルト混じり細砂（層厚 0.3～0.4 m）から 13 世紀頃の土師器・瓦器の小片が出土している。二次堆積した遺物と考えられる。

㉛ 2023-2（中津町）現地表下 0.9～1.1 m 以下で遺物を包含する暗灰黄色シルト～粘質シルト（層厚 0.05 m）とにぶい黄褐色砂混じり粘質シルト～明黄褐色粘質シルト（層厚 0.3 m）を確認した。当該層は耕作土と考えられる。遺物は土師器・瓦器の小片が出土している。

㉜ 2025-1（舟木町）現地表下 0.7 m（標高 7.2 m）で確認した耕作土と考えられる褐色細礫混じり粘質シルト（層厚 0.3 m）から土師器・瓦質土器が出土している。

#### 舟木遺跡・舟木遺跡 B 地点

中世の遺物が出土しているのは以下の 2 地点である。共に舟木町に位置する。

㉝ 舟木遺跡 1995-1（市教委 1996）現地表下 0.8 m で確認した灰褐色砂質土（層厚 0.2 m）・淡灰茶色砂質土（層厚 0.2 m）から土師器・瓦器・磁器など（図 5-61～64）が出土している。包含層下面で溝・土坑・柱穴などを検出し、各遺構から土師器・黒色土器・瓦器などが出土している（図 5-29～60）。いずれも 11 世紀中頃である。

㉞ 舟木遺跡 B 地点 2019-1 現地表下 1.25 m で確認した黄灰色細礫～粗砂混じり砂質シルト（層厚

0.2～0.35 m) から土師器・黒色土器などが出土している。包含層下面で遺構を確認している。

**牟礼東遺跡**

中世の遺物が出土している地点は以下の5地点である。いずれも寺田町に位置する。

③⑤ 2004-1 (市教委 2005) 現地表下 1.4 m で確認した淡青褐色土 (層厚 0.15 m) から 12 世紀後半～13 世紀前半の土師器・瓦器が出土している。包含層下面で溝・柱穴などを検出している。

③⑥ 2010 年度 現地表下 1.0 m で確認した青灰色粘性砂質土 (層厚 0.5 m) から土師器・瓦器が出土している。

③⑦ 2013 年度 現地表下 0.9 m で確認した青灰色粘質シルト (層厚 0.25～0.3 m) から土師器・

瓦器が出土している。包含層下面で遺構を確認している。

③⑧ 2017-1 現地表下 1.4 m (標高 6.5 m) で確認した褐灰色粘質シルト (層厚 0.2 m) から 12 世紀後半～13 世紀前半の土師器・瓦器・青磁が出土している。包含層下面で溝 1 条を検出している。

③⑨ 2021-1 (市教委 2022) 現地表下 1.1 m (標高 6.8 m 以下) で黄灰色粗砂混じりシルト～粘質シルト (層厚 0.15 m・上層) と黄灰色シルト～粘質シルト (層厚 0.1 m・下層) を確認した。上層からは 13 世紀中葉前後に比定される土師器・瓦器・白磁 (図 5-65～68)、下層からは 12 世紀後半に比定される土師器・瓦器 (図 5-69～72) が出土している。

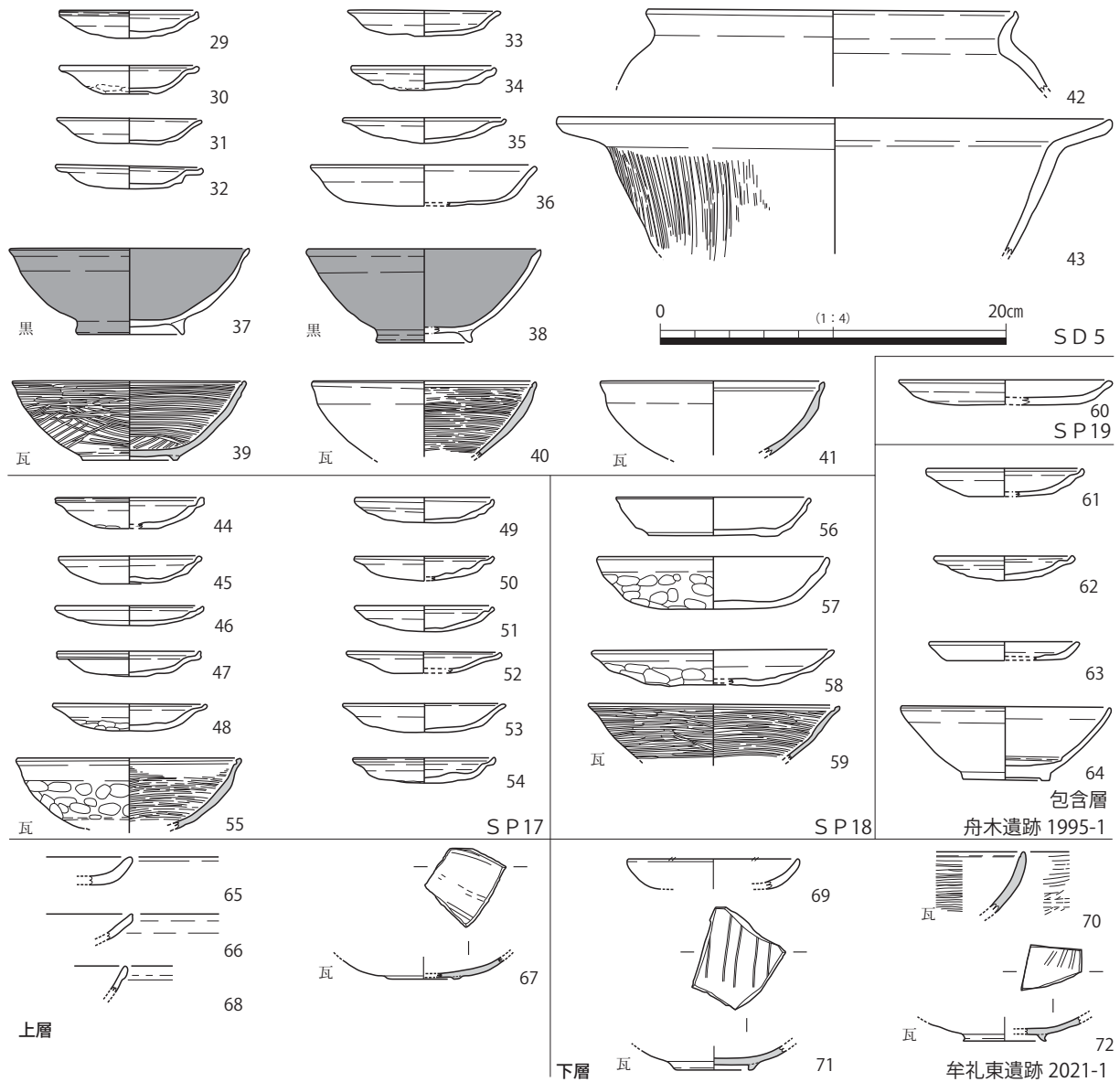


図 5 舟木遺跡・牟礼東遺跡 出土遺物実測図

以上が中世の遺構・遺物を確認した地点である。遺物の年代は10世紀半ば～14世紀初頭におよぶ。複数の時期にまたがる地点もあるが、10世紀は1地点(②)、11世紀～12世紀初頭は6地点(⑦・⑩・⑪・⑭・⑯・⑳)、12世紀は4地点(⑤・⑰・㉓・㉔)、12世紀後半～13世紀初頭は4地点(①・⑭・⑳・㉓)、14世紀は2地点(⑱・㉔)となっている。ただし、時期を判断できる地点は少ない。そのため現時点では、牟礼遺跡の範囲では中世の遺物出土地点が北西から南東方向に帯状に延びていることを指摘するに留める(図3・6)。また、明確に集落関連の遺構と判断できるのは1996-1調査(②)と2002-1調査(⑤)のみで、その他では耕作土に含まれる遺物を採集している地点が多い。遺物出土地点以外でも、耕作土の存在を確認していることから、遺跡内の大部分は耕作地であったと考えられる。一方で、舟木遺跡では11世紀代、牟礼東遺跡では12世紀～13世紀にかけての集落関連の遺構が確認されている。

このことから、当該期には小規模な居住地が存在する様相であったと考えられる。

### 3. 流路痕跡から推定される立地環境

図6は『新修茨木市史』(茨木市2004)で明治時代の地籍図を基に復元された水路を合成したものである(註5)。これを見ると、ある程度方位に沿うものと、北西-南東方向に延びているものが認められる。前者は条里地割に伴うものであり、地割に沿って人為的に巡らされたものと判断される。一方、後者は自然流路の痕跡と考えられる。特にA-A'とB-B'部分に顕著に認められる。また、牟礼遺跡における中世の遺物出土地点の大半がA-A'、B-B'に挟まれた範囲に収まっていることが判る。

この部分は、図7に引用した、阪田育功氏が復元された玉櫛遺跡周辺の地割と河川流路の図で「カ・キ」間の流路痕跡にあたる(阪田2003)。

この流路痕跡は、幅が100m以上におよぶこと

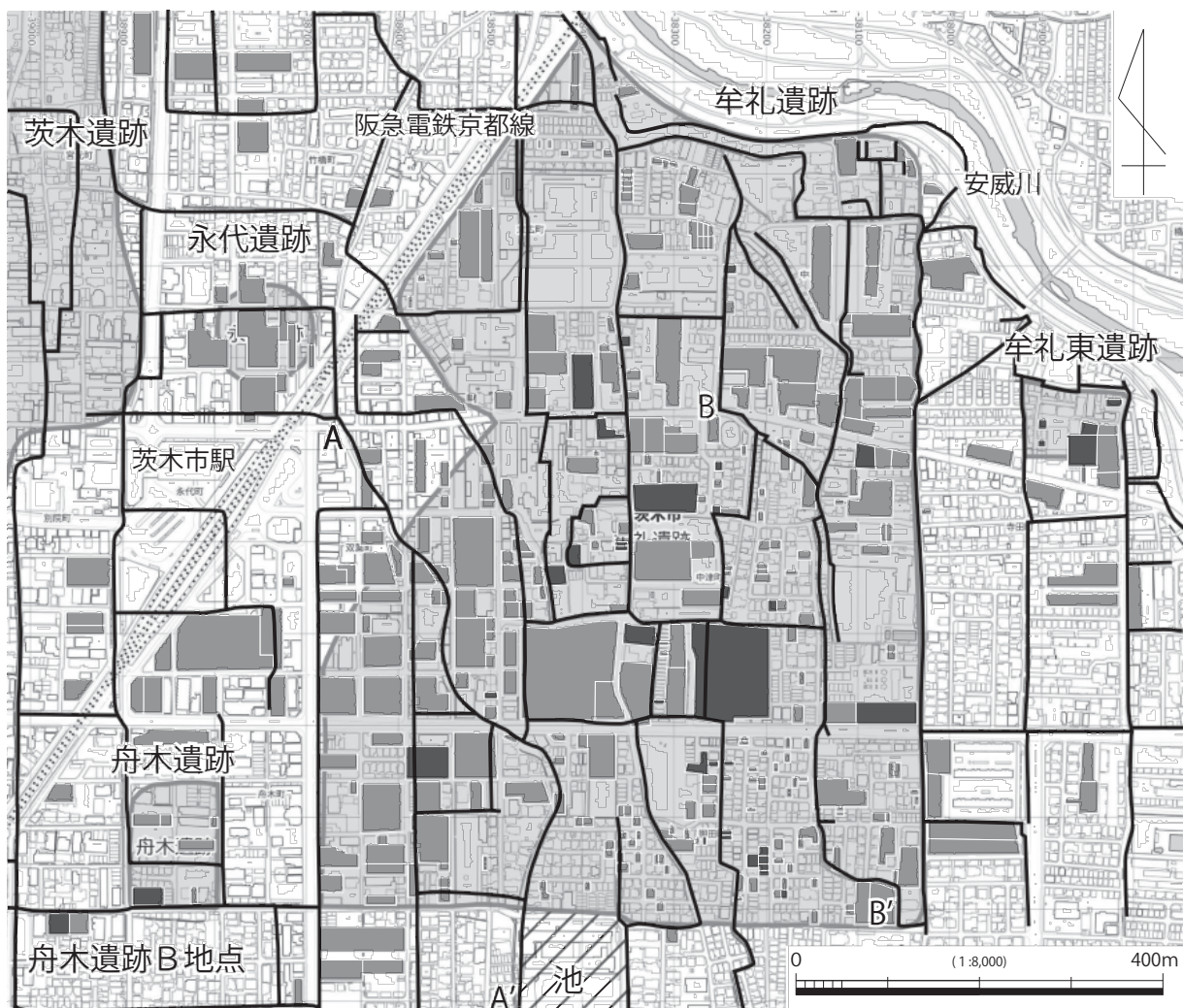


図6 牟礼遺跡周辺水路復元図



出土遺物の中心となる年代は、12～13世紀代であり、史料で確認できる時期よりはやや古い。現時点での調査成果からは、11世紀代には舟木遺跡、12世紀代以降は牟礼遺跡内に小規模な居住地が営まれていたと考えられる。

今回は、中世の遺物が分布する範囲を示したに留まり、集落域と生産域の広がりを考えるまでには至らなかった。また、集落の消長には近年指摘されている気候変動の影響（中塚 2020）も考慮する必要がある。今後はそれらも念頭に置いた上で、市内の他遺跡も含めて考えていきたい。

#### 註

- 1) 図2では盛土以下の層位を確認した調査地点のみを示しており、立会調査などで堆積状況の確認に至らなかった調査地点は示していない。また、茨木遺跡の範囲と安威川左岸の調査地点は図示していない。
- 2) 共同住宅や商業施設など敷地面積の広い計画では確認調査時に2m以上掘削することは可能であるが、個人住宅など小規模な敷地面積の調査では、湧水が生じる地点もあるため、安全上の観点からも掘削深度が限られ、中世の遺構・遺物を確認することが限界となっている調査が多い。
- 3) 図3の番号は遺構・遺物を確認した地点のみ記し、本文と対応する。なお、2013年度以前は確認調査に調査番号を付与していなかったため、本文では調査年度のみを記した。また、今回は中世のみを対象としているため、図3で黒塗りにしていないことが埋蔵文化財が存在しないことを意味するものではない。また黒塗りは調査区形状ではなく、敷地全体に行っている。
- 4) 牟礼遺跡 2012-3、舟木遺跡 1995-1 の出土遺物については再トレースを行った。
- 5) 茨木・戸伏・内瀬・馬場・水尾の各項目で掲載されている復元図を合成した。
- 6) 阪田氏の論文が掲載された報告書は2003年刊行である。この時点では、今回集成した遺物出土地点の大半は調査が実施されていなかった。
- 7) 溝杭庄については前稿（木村 2024）でまとめている。また、『経俊卿記』の記載は大炊寮領の初見となる史料であるが、前稿では漏れていたため、記して補っておく。
- 8) 牟礼東遺跡の所在する寺田町について、その地名から、溝杭庄との関連が考えられている（吉川 2009・2024）。
- 9) この他、14世紀頃の『鐙矢伊勢官方記』という史

料にも中村御厨の記載があることが記述されているが（福留 2012）、翻刻の掲載誌に拠って確認することができなかったため、本文中では触れていない。

#### 参考文献

- 茨木市 2004 『新修茨木市史』第八巻 史料編 地理  
茨木市 2014 『新修茨木市史』第七巻 史料編 考古  
茨木市教育委員会 1996 『平成7年度発掘調査概報』  
茨木市教育委員会 2003 『平成14年度発掘調査概報』  
茨木市教育委員会 2005 『平成16年度発掘調査概報』  
茨木市教育委員会 2011 『平成22年度発掘調査概報 - 個人住宅建築に伴う発掘調査報告 -』  
茨木市教育委員会 2013 『平成24年度発掘調査概報 - 個人住宅建築に伴う発掘調査報告 -』  
茨木市教育委員会 2014 『平成25年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報6 - 国庫補助事業に伴う発掘調査 -』  
茨木市教育委員会 2015 『平成26年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報7 - 国庫補助事業に伴う発掘調査 -』  
茨木市教育委員会 2018 『平成29年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 - 平成29年度国庫補助事業 -』  
茨木市教育委員会 2021 『令和2年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 - 令和2年度国庫補助事業 -』  
茨木市教育委員会 2022 『令和3年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 - 令和3年度国庫補助事業 -』  
茨木市教育委員会 2024 『令和4年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 - 令和4年度国庫補助事業 -』  
木村健明 2024 「史料にみる溝杭庄・沢良宜庄・新屋庄」『茨木市立文化財資料館 館報』第10号 茨木市立文化財資料館 pp. 5-14  
阪田育功 2003 「玉櫛遺跡周辺における河道の変化と条里水田の開発」『玉櫛遺跡II』財団法人 大阪府文化財センター pp. 187-194  
続群書類従完成会 1983 『群書類従・第一輯』神祇部「神鳳鈔」 pp. 300-324  
中塚武監修 『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』臨川書店  
福留照尚 2012 「第七章第三節 11世紀後半の荘園」『新修茨木市史』第一巻通史I 茨木市 pp. 603-625  
明治書院 1970 『圖書寮叢刊 経俊卿記』 pp. 421  
吉川真司 2009 「藤原鎌足と三島別業」『藤原鎌足と阿武山古墳』茨木市・茨木市教育委員会 pp. 31-37  
吉川真司 2024 「古代荘園の歴史」『古代荘園 奈良時代以前からの歴史を探る 岩波書店 pp. 23-85